

林業の未来

若手が議論

四日市

林業の未来を考えるフォーラムが29日、四日市市の市総合会館であり、若手の林業家や林業にかかわっている人が活発な議論を交わした。パネルディスカッションでは、木材価格の低下や若者の林業への就業、身近な森林を外国資本が買収している問題について話し合われた。

四日市市のNPO法人森

林の風が主催し、県内外から約80人が参加した。

パネリストで、諸戸林友(大台町)の川端康樹代表は、木材価格がピーク時の3分の1から10分の1までに下がったことを挙げ、「今後は日本と世界の林業を同等に考えていくべきだ」。また、津市のNPO法人もりずむの藤崎昇理事長(54)は「国の政策もあり、木材が薄利多売の傾向にあるが、どうにかして単価を上げていかないとダメだ」と語った。